

令和5年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 地域再生の核となる大学づくりに関する事業

申請組織 看護学部

申請組織長 役職名 学部長 教授 氏名 杉浦 美佐子

統括責任者 役職名 教授 氏名 福田 由紀子

課題名 栢山『星が丘まちの保健室』の開設

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	福田 由紀子	看護学部地域・在宅看護学 教授	栢山『星が丘まちの保健室』開設事業統括としてすべてに責任を負う
		杉浦 美佐子	看護学部基礎看護学 教授	栢山『星が丘まちの保健室』運営、企画立案
		又吉 忍	看護学部地域・在宅看護学 准教授	運営、企画立案、教室の実施
		川島 一晃	看護学部専門基礎 准教授	運営、企画立案、教室の実施
		月精 佳恵	看護学部地域・在宅看護学 助手	企画立案、教室の実施
		中原 弘喜	看護学部地域・在宅看護学 助手	企画立案、教室の実施

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200字~300字程度で記述)

「まちの保健室」とは、学校に保健室があるように、地域にも気軽にに行ける「よろず相談」ができるところや居場所があるといいねと始まったのが「まちの保健室」であり、大学や全国の都道府県看護協会で開催されている。

今回開催した栢山『星が丘まちの保健室』は、地域住民の心身の健康、子育て、生活習慣病予防、認知症予防、介護などのさまざまな不安や困りごとを、気軽に健康に関する相談に応じる、ゆっくり語れる「場」を提供することを目的とした。事業の対象は、幅広い年齢層のすべての地域住民である。少子高齢社会において重要な予防活動を進め、学生や教員の知的活動の活性化を図り、地域社会の学生ボランティアや教職員の派遣などのライフサポーターとしての存在となるべく活動を行った。

2. 事業方法（特色・独創性）等（300字程度で記述）

「まちの保健室」は、人々が集まる場として「まちの保健室」は開設されていた。しかし、新型コロナウイルス感染が蔓延し、リアルに交流が持てなくなった時期があった。その中で、集まることができなくてもコミュニケーションは取れるよう、椛山『星が丘まちの保健室』では ICT を活用したリモートによる「まちの保健室」の開催を実施した。椛山『星が丘まちの保健室』の独創的な点は対面開催と ICT を活用したリモート開催のハイブリッドで実施することである。

今年度は、下記を実施した。

- ① ICT を活用したリモートによる教室、相談会を実施
 - ・介護教室 2 回、最期の生活をどう迎えるか 1 回、健康相談会 2 回
- ② 行政組織と連携し椛山『星が丘まちの保健室』の開催
 - ・認知症サポーターフォローアップ講座

3. 事業の成果（600字～800字程度で記述）

1) 椛山『星が丘まちの保健室』の名称を考案・広報活動
看護学部の学生から椛山『星が丘まちの保健室』のキャッチコピーとネーミングを公募した。さらに、広報のためのポスターを作成した。また、千種区・名東区等の地域の活動に参加し、地域のニーズの把握を行った。さらに、作成しポスターを配布し、広報活動を行った。

2) 在宅看護学では、千種区いきいき支援センターと協働し、認知症サポーター養成講座を 1 年生に開催している。この活動を基盤に、1 年生から地域におけるボランティア活動に積極的に取り組んでもらいたいためである。また、椛山『星が丘まちの保健室』の独創的な ICT を活用したリモート開催の実施を目指し、高齢者も ICT が活用できるよう一番身近なデバイスを携帯電話とし、「スマホお悩み相談室」に積極的に参加した。さらに、下記の内容を実施した。

- ① 千種区、名東区の行政組織と連携した活動
 - ・「認知症について学ぼう」5月27日（土）学生 9 名参加 開催場所：星が丘テラス
 - ・スマホお悩み相談室 7月19日（水）学生 3 名参加
7月26日（水）学生 3 名参加
8月 2日（水）学生 4 名参加
12月14日（木）学生 10 名参加
予定：2024年3月29日（金）学生 5 名参加
 - ・認知症サポーターフォローアップ講座 12月11日（月）学生 5 名参加
- ② ICT を活用したリモートによる教室、相談会を実施
 - ・介護教室 2 回：家族を介護している方への介護方法を説明
 - ・最期の生活をどう迎えるか 1 回：参加者 5 名とリモートで ACP について考えた

4. キーワード（本事業のキーワードを 1 つ以上 8 つ以内で記載）

①まちの保健室	②地域住民	③学生	④ICT
⑤健康教室	⑥ボランティア活動	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

【課題・反省点】

今回は企画していた椙山『星が丘まちの保健室』を大学内で実施することができなかった。その理由として、新型コロナウイルスの終息を迎えてもなお、実習施設からの新型コロナウイルス感染予防の徹底等で、看護学部内での地域住民が参加しての健康教室等の実施が困難であったためである。また、坂が多く「高齢者からは大学に来ることが大変」との意見があった。次年度の開催のため、他の施設（会場）での実施について検討中である。また、椙山『星が丘まちの保健室』はICTを活用したリモートで開催した。参加者は高齢者や障がい者であった。今後は、今回開催参加することができなかった子どもを対象とした、ICTを活用した椙山『星が丘まちの保健室』を企画したい。

【今後の取組み】

- ・次年度開催予定の学生と地域住民の交流会や健康教室等のため、地域住民、特に高齢者が参加しやすい開催場所（施設）を検討する。開催場所は星が丘とする。
- ・椙山『星が丘まちの保健室』は学生・教員はライフサポーターとしての存在となる。さらに、学生・教員は、それぞれの学習状況に応じて参加し、地域で暮らす住民の方々とふれあい、経験を重ね地域における看護学活動を学ぶことができる。
- ・星が丘テラスや大学内で椙山『星が丘まちの保健室』を開催することで、地域住民（千種区）との交流や地域貢献活動に参加することで、椙山『星が丘まちの保健室』が教育の場となり、健康教育、保健室の運営等の経験を重ね、地域における看護学活動を学ぶことができ、教育の質保証に資することができる。
- ・看護学部教員の在宅看護学教員を中心に基礎看護学、精神看護学等多くの領域の先生と連携し学生とともに実施する。また、総合大学の強みを生かし学部を超え、多くの先生方と連携を図り、椙山『星が丘まちの保健室』の活動を推進したい。